

母子すっぽんぽん乱交の場と化しているホテルの最上階の公衆浴場

「ママッ！！今日ももちろん僕のオチンポ舐めるよねっ！！！」

「もちろんよっ！！ユウトのオチンポはママの食べ物だものっ！！」

ニコッと笑顔を見せてママは一気にジーンズを下までずり下げた。足首にかかったジーンズを、無造作に両手ではぎ取ってしまって、ママの太ももは露わになった。

ばーーーーんっ！！ぶりんっ！！

はち切れそうな太もも。

「ママのここが僕の大好物なんだっ！！！」

そう言うと、僕はママのパイパンマンコにしゃぶりついた。

割れ目がとても柔らかくて肌色で美味しい。

無毛なので赤ん坊のよう。

透明のキレイなキレイなお汁が垂れてくるんだ。

「これからあと何時間もずっとシックスナインしましょう
ねっ！！おちんちんとオマンコ舐め合うのよっ！！」

ママは頬を赤らめ微笑んだ。

夜更けは街の空気も静か。

遠くで聴いたことのない鳥の鳴き声をする。

ちょっぴり不気味な夜。

僕とママはベッドの上で舐め合っていた。

しわくちゃになったシーツ。

9月上旬の夜はまだ少し暑く、べっとりと背中に汗がついている。僕もママも。その汗も全部全部舐めとり合った。

「・・・・・・・・もうすぐホテルの最上階の大乱交パーティーに新しいメンバーが来るんだよね」

舐め合いながら話す僕とママ。

「そうね。ユウトも新しいおっぱい欲しいでしょ・・・・・・・・」

「欲しいに決まってるよ。その何よりの根拠がこのペニスさ
っ」

僕は反り立ってビクンビクンしてるペニスをママの口へ持
って行く。

「そうね。このオチンポが全て物語っているわね。新しいお
っぱい舐めたいって・・・・・・・・」

母子乱交は夜な夜な行われている。

いつの間にか手をつないで母子たちが辿りついたのがその
ホテルの最上階の混浴公衆浴場で・・・・・・きっとそのホテル
はお化けのホテルか何かだろう。

場所はまだ分からない。街中であることは確かだけれど。
地図にも載っていないんじゃないかなあ。

僕たちはそこでもうずっとずっとセックスし続けているんだ。

「とにかく新しいおっぱいが欲しいよね」

だけど本当に僕が欲しいのは割れ目。太ももと太ももの付け
根部分の真っ白な・・・・それに少しだけ、ほんの少しだけ
肌色を帯びた割れ目、空洞・・・・洞穴（ほらあな）なの
けど。

(体験版はここまでです)